

## 2023 年度ストレンナ（贈りもの、年間目標）

### 「ドン・ボスコの家族として社会のよきパンだねとなろう」

1. 神の国のパンだね
2. 神の国とは、光と影のなかで、つまり私たちの世界において成長しつづけるものです
3. 人類家族には責任感のともなう息子たちや娘たちが必要です
4. 信徒たち——「世界を内側から聖なるものとする」キリスト者
5. パンだねとなるように召されたドン・ボスコの家族
6. 美しい実をつけた大木のかかげで
7. 今日の世界におけるパンだね（酵母 YEAST）としての若者たち

2022 年 5 月にトリノのヴァルドッコで開催されたサレジオ家族世界諮問会議の際に、次の『2023 年度ストレンナ』を通して、サレジオ家族における信徒の次元、つまりドン・ボスコの「足跡」をたどることで常に主キリストに忠実であろうとする家族というテーマを深めるよう依頼されました。このコメントは、この要請に応えるためのものです。

まず、今回の『2023 年度ストレンナ』が二つのグループに対して集中的に語りかけるものであることを、心にとめていただきたいと思います。

まず第一として、世界中のドン・ボスコの家族に所属している 10 代のあらゆる若者たち、つまりサレジオ家族の宣教活動の「影響を最初に受ける者（受益者）」たちに対して語りかけたいのです。実に、彼らは初めからサレジオ家族の家におり、私たち家族のあらゆるグループの関心の中心におり、キリスト者として、あるいは他宗教の信者としてさえ「地の塩、世の光となりなさい」つまり「今日の人類家族のパンだね（酵母、イースト菌）となりなさい」という、この主キリストからの強い呼びかけを知ることができるはずです。この呼びかけは、非常に美しい約束であり、それぞれの人が自分の召命を生きるための美しい方法です。同時にこの呼びかけは、若者たちの人生の旅路に同行する任務を持つ私たち教育者に向けられた貴重な挑戦でもあり、若者たちが明確な約束と責任のもとで、出会う相手一人ひとりのために友愛と正義を求めて生きることができるよう励ますためのものでもあるのです。

さらに第二として、今回の『ストレンナ』はサレジオ家族のあらゆるグループに対して、私たちの家族にふさわしい信徒の次元を見直させるとともに、私たちのあいだにすでに存在し、これからも常に存在しなければならない各自の職業を活かした相互の補い合いを再発見するように（あるいは発見するように）招こうとしているのです。

私たちの教育方針および霊性を最も特徴づけるものに照らして、青年やその他の若者た

ちが、それぞれ、イエスが語るたとえ話のように、人間家族という「パン」が成長し、より大きく、おいしくなるのを助けるよい「パンだね」（酵母、イースト）のようになれることを見い出すことができるように、特に助けるつもりです。一人ひとり世界を刷新する真の積極的な担い手となり得るのです。なぜなら、一人ひとりがそれぞれのやり方で、「この地上における使命」（註1）を担っているからです。

このことは、**ドン・ボスコの家族**にとって信徒の重要性を再発見することを強く促す呼びかけなのです。実際に、ドン・ボスコの家族の大部分が、あらゆる大陸に分布する、さまざまな国籍の女性たちや男性たちなのです。私たちを特徴づけるこのような多様性は、そのような状況そのものがすでに贈りものであり、私たちが避けることのできない責任を生じさせているのです。このように文化的に豊かで、世界全体と幅広く結びつき、存在していることは、私たちが新たに生み出す使命の歴史およびカリスマの実りであり、まさに聖霊の賜ものなのです。地球の東から西、のみならず南から北にいたるまでの数多くの若者たちのために、「神の民」（聖書のギリシア語原文では *laós* [ラオス、「民」という意味] で、イタリア語に訳すと *laico* [ライコ]、英語に訳すと *lay* [レイ]、つまり「人々の集まり」のこと）として相手と共にいることは、教会が長いあいだ強く求めてきたことと完全に重なることであり、あまりに断片化しすぎた世界がますます必要としていることなのです。

**サレジオ家族における奉献された女性や男性**として、私たちも同様に「人類というパン生地におけるパンだね」となり、多くの兄弟姉妹の福音的な世俗性によって豊かにされながら、互いに支え合って生きるよう招かれているのです。実際に、私たちは日々のほとんどを彼らと共有しているのです。なぜなら、私たちは、ドン・ボスコが最初のオラトリオでいのちを吹き込んだ家族のなかで生まれており、そのはじまりのときから奉献生活者および信徒とで構成されていたからです。私たちは、生活と召命とのあいだにある強い親密さと分かち合いのなかで生まれたのです。つまり、簡潔に言えば、私たちは家族として生きており、常に自らを捧げることで、おたがいに相手を完成させるために召されているのです。

## 1. 神の国のパンだね (Yeast ; 酵母、イースト菌)

「そしてイエスは言われた。『神の国を何にたとえようか。パンだねに似ている。女がこれをとって三サトン(42 𐄂)の粉に混ぜると、やがて全体がふくれる』(ルカ 13・20-21)。

パンだねは静かに働きます。醗酵が静かに行われる様子は、ちょうど神の国 [王としての神による支配=神による責任ある配慮=神のおとりはからい] の働きのようにです。醗酵は「内側から」はじまるのです。

そして実際に、パンだね(酵母)が小麦粉や生地に混ざって働き、すべてを醗酵させてい

るときに、その音を聞くことができた人はいるでしょうか。このイメージは、神の国がどのように作用するのかを教えてください。使徒パウロは、本質を思い起こすことによって、神の国を示しています。「神の国は食べ物や飲み物ではなく、義と平和と聖霊による喜びなのです」(ローマ 14:17)。醗酵は聖霊の内面的で目に見えない働きであり、心に混ぜられたパンだねによるものです。そして、パンだねが混ざることによって活動を行うように、福音もまた同様なのです。

『ストレンナ 2023 年』のテーマに選ばれたパンだねのたとえば、イエスが生き、教えた神の国の本質を表現しています。つまり、パンだねのたとえば、福音的な知恵や教育方法および教育的な内容とかかわりの深いたとえなのです。

さまざまな解釈や強調点が考えられます。今年の『ストレンナ』を定めることによって私が選んだ解釈は、まさにパンだねを神の国の実りと成長のイメージおよびシンボルとして提示することです。それは人びとの心のなかに潜んでいる領域であり、神が私たちに植えつけた呼びかけとしてのいのちへの召命の賜ものの豊かさを増し、全世界の修道者やドン・ボスコの家族全体の使命を方向づけるものです。

「わずかなパンだねは生地全体をなめらかにする」(ガラテヤ 5:9)。少量の小麦粉にわずかなパンだねを加えると、2倍あるいは3倍と膨らむのは驚くべきことです。主キリストは、神の国が、パンを作るときに小麦粉(生地)をふくらませるパンだねのようなものだと述べます。イエスが強調するように、パン全体の量から見れば、パンだねなどは、大したことのないものです。しかしながら、逆の視点でながめれば、パンだねはほんの少しだけで大きな役割を果たすことができるものなのです。パンだねの特徴を述べるとすれば、それが**活き活きとしたかけがえのない材料**であり、絶えず活発に動きつづけているがゆえに、パン生地全体に影響を与え、状態を整え、変貌させるだけの能力を備えているのです。

したがって、神の国とは、次のようなものだと言えるでしょう。

「神の国は、人間の目で見ればささやかに映り、自分たちとは一見無関係に見える現実です。神の国に含まれるには、人は心を貧しくしなければなりません。つまり、自分の能力を信じるのではなく、神の愛の力を信じ、世間から見て重要であるように行動するのではなく、むしろ単純で謙遜な者を好む神の目に尊い存在として映らなければならないのです。たしかに神の国の働きは私たちの協力を必要とします。しかし、神の国は何よりも主キリストの導きなのであり、賜ものなのです。私たちのあまりにもか弱い努力は、世界の諸問題の複雑さの前では無力なものに見えますが、神の働きと統合されるときには、いかなる困難も恐れなくともよくなるのです。主キリストの勝利は確かなものだからです。主キリストの愛は、地上に存在するあらゆる善の種を芽生えさせ、成長させるのです。このことは、私たちが遭遇する悲劇や不公平や苦しみにもかかわらず、私たちの歩みを信頼と希望ある状態へと開

放してくれるのです。善と平和の種が芽を出し、成長するのは、神の慈愛に満ちた愛がそれを成熟させてくれるからです」(註2)。

## 2. 神の国とは、光と影のなかで、つまり私たちの世界において成長し続けるものです

福音書では、神の国はイエス自身とともにやってきます。神の国はイエスの存在そのものであり、つまり神のことばそのものとして生きるイエス、あるいは受肉したことばなのです。それは、イエスが人びとと共に生き、あらゆる社会的な背景を持つ人びとと交わり、その関わりにおいて、他の人びとが排除する相手を好むという彼の生き方なのです。マタイによる福音書の一節に、イエスが生きた神の国のあり方を示す窓が開いています。

「しかし、ファリサイ人たちは出て行き、いかにしてイエスを滅ぼそうかと策謀をめぐらせた。イエスはそのことを知ると、そこを立ち去られた。数多くの群衆がイエスに従ったので、彼はそこにいる全員をいやしたが、自分のことを決して言いふらしてはならないと命じた。これは、預言者イザヤを通して語られたことが実現するためであった。『見よ、ここに私が選んだしもべがいる。私の心になつた愛する者。このしもべに私の霊を授ける。彼は異邦人に正義を宣べ伝える。彼は争うこともなく、大声で叫ぶこともない。街路でその声を聞く者もない。彼は傷ついた葦を折らず、燃えている灯芯を消すこともない。正義を勝利に導くまで。そして、異邦人は彼の名に希望をかける』」(マタイ 12・14-21)。

ここでは、あまりにも普通の人びと、貧しい人びと、癒しを必要とする病人たちのあいだで、イエス自身がパンだねとして働いていることが描かれています。

「彼はそこにいる全員をいやしたが」と、福音書において語られていることこそが、常にラオスとしての人びとのまっただなかにおいて、社会階級や出自によって相手を差別しないイエスの「素顔」なのです。彼らは皆、貧困にあえいでおり、援助を必要とする点において共通の課題を背負って連帯しているのです。先ほど引用した福音書の最初の節でファリサイ派の人びとによるイエスに対する公然たる敵意が語られていますが、それにもましてイエスにとっては人びとの弱りきった状況は決して他人事ではないのです(第二コリント 8・9 参照)。

「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」(マルコ 1・15)。このことばは福音書の中で 122 回登場しており、イエスの口からは 90 回出てくる、と偉大な神学者カール・ラーナーが何度も表明しているように、イエスの説教の中心が神の国であることは明らかです。イエスは神の国を完全に生き、最も小さい者に対する神の無条件の愛を行い示し、その生き方は十二人の弟子たちの心に沁み込んで受け容れられ、初代教会に受け継がれました。「私を信じる者は、私がしているわざを行い、むしろ、これらよりも大きな

わざを行うようになる」(ヨハネ 14・12)。

今日でも私たちは、もっか建設中のこの神の国において、多くの善が行われ、それがあらゆる場所で成長していることを知っています。そして、私たちの人間的な家族としての在り方や行動の直接的な結果として、多くの悲しみや痛みが生じたことをも同様に理解しています。

私たちは、神の国を神による方法で建設する神の行動様式に目と心を開くよう求められているのです。神の在り方と行動様式に賛同することによって、私たちは神のぶどう園の働き手として、神に協力することができます。そうでなければ、私たちの生き方は「神の御手のなかにある」のではなく、単に私たちにとってだけの自分勝手なわざに過ぎなくなります。

サレジオ家族の特徴としてのあらゆるものごとに幅広く開かれた生き方は、御国の福音と完全に調和しています。世界の約 75%の国々で、非常に数多くの多様な人間的共同体と関わっていること自体が、すでに一致と宣教のための恐るべき可能性を示しているのです。実に、教会の 99%以上は信徒で構成されています。もし私たちが人類全体の家族を考慮し、包む込むとするならば、この割合がどれほど増加するのか想像してみましょう。30 年以上前に教皇聖ヨハネ・パウロ 2 世が書いたように、この広大な世界では、「宣教活動は、まだ始まったばかりに過ぎない」(註 3) のです。

私たちの人間的な貢献やささやかな努力は、時には取るに足りないものに見えるかもしれませんが、神の前では常に尊いものなのです。私たちの努力の効果や結果を、私たちがどれだけ投資したか、私たちに必要な努力に価値を置くことによって測ってはならないのです。ドン・ボスコにとってさえ、最善を目指すことは善の敵となりうるものでした。最初の一步を踏み出すために、理想的な状況を待つ必要はないのです。まず自分の限界を自覚し、不毛な勝利主義や自己主張から解放され、同時に信頼に満ち、「最も冷酷な者(少年)にも優しいところがある」(BMV, 237) のだと確信することが大事です。これがサレジオ家族のカリスマに従って生きる御国のスタイルなのです。

神の「目」および「心」で現実を見ることで、ささやかさや謙虚さが決して弱さや愚鈍さを意味していないことが理解できるようになります。私たちに要求されていることが数多いにもかかわらず、私たちにできることはごくわずかです。しかし、私たちを成長させてくださるのは神なのですから、私たちの生き方が決して「足りない状態」とか「立派な生き方とは縁がない」などということとはできないはずで、私たちを助けてくださるのは、神の力なのです。そして、私たちの献身、私たちの努力、私たちが生地の中の貧しいパンだねであることに最期までつき合ってくださいるのが神なのです。ただし、その際に、私たちができる限りのことを、常に神の名において行うことが条件となります。

### 3. 人類家族には責任感のともなう息子たちや娘たちが必要です

「現代の時代の人びとのよろこびと希望、苦悩と不安、特に貧しい人びとや何らかの苦悩を抱えた人びとのよろこびと希望、苦悩と不安は、キリストに従う人びとのよろこびと希望、苦しみと不安でもあるのです。実に、真に人間的なもので、キリストの弟子たちの心に響かないものはないのです」(註4)。

第二バチカン公会議の司牧的な憲章としての『現代世界憲章』は、いま引用した文章で始まっています。私たちは三年後に、この憲章の公布 60 周年を迎えます(註5)。それは、ドン・ボスコのような使命を遂行する教会と世界の人びとにとってなじみ深い景色であり、そこには若々しい活力と、貧しく苦しむ人びとへの思いやりが常に存在しています。

それは私たちが生きるために与えられている、ますます激しさを増し、ますますグローバル化し、しばしば悲劇的で、最初に手を差し伸べられるべきなのが人口の最も若い層であるような課題を持つこの時代において連帯感を感じ、恐れずに参入せよ、という招きです。

つまり、私の人生は決して他の人たちから切り離されたものではないということを理解し、私たちの存在の意味を見い出すよう促してくれます。「私」のことがらと「私たち」のことがらとは常に重なり合っており、その重なりを受け容れてうまく生きてゆくしかないのです。イエス・キリストによるパンだねのたとえ話とこの『ストレンナ』の提案とは、人類の歴史を形成するプロセスの進化に、時間をかけて同調することを助けてくれます。そして、私たちもまた、世界がより住みやすく、より公正で、より友愛に満ちたものになるように、この人類家族を築きあげる責任と賛意とを備えているのです。

私たちは、自分たちがどれほど多くの善に囲まれているかを知っていますが、同時に、すでに述べたように、どれほど多くの苦しみや不正や痛みが、私たちの住む世界をいまだに覆っているのかも知っています。教皇フランシスコは、次のように言って、このことを私たちに思い起こさせてくれます。

「新しい世代は、過去の世代の苦勞と成果を引き継ぎながらも、さらに高い目標を掲げなければなりません。これがその道です。善は、愛、正義、連帯とともに、一度きりで達成されるものではなく、日々実現されなければなりません。過去に達成されたことに甘んじて、それを楽しむことはできません」(註6)。

貧しい人々の叫びはますます大きくなり、その大多数は子どもや十代の少年少女や若者たちです。私たちは、自分たちの使命の始まりに見られるような、広範囲かつ身近な課題に直面しています。私たちは、ドン・ボスコが彼の時代のために養成されたのと同じように、この時代のために養成されたのです。私たちは、自分たちが個人として、あるいは共同体と

して属している人類家族から湧き起こる訴えを強く感じています。この家族は、最も弱い者や脇に追いやられた者のための正義と尊厳（註7）、平和と友愛（註8）、共通の家庭（註9）への配慮を必要とすることによって深められています。

それに劣らず強く過激なものは、言い換えれば、他のすべての願いの根底にあるものは、真理への要求（註10）と神への要求（註11）です。

このような現実を前にして、私たちは、今日できること、今日しなければならないことを明日まで延期することはできないという事実を強く意識していなければなりません。私たちは、人類家族を内側から変革するパンだねとなるよう求められているのです。これは基本的な使命であり、私たち自身の人生であり、私たちが人間であることと一致しています。誰もこの使命から逃れることはできませんし、自分がこの使命から除外されていると考えることもできないのです。

ですから、ドン・ボスコ家族の一員として、またパンだねの福音の迫力に触発されて、私たちはこの人類家族およびサレジオ家族の一員であることの豊かさを深め、理解するつもりです。この家族の多くは女性信徒および男性信徒であり、奉献生活者として彼らを補うことで自らを豊かにしなければならないのです（註12）。信徒であることは、ドン・ボスコの家族にさまざまな形で同調する、あるいは同調する世界のあらゆる存在を圧倒的に特徴づける人生の状態であり、召命なのです。このことに感謝し、真の一致した家族として、私たちは、様々な文化と社会の中で、彼らの人生の贈りもの、信仰の強さ、家族の美しさ、人生と仕事の経験、そして青年と現代の世界のためにドン・ボスコのカリスマと使命を解釈して生きる彼らの才能を最大限に活用しようと努めているのです。

#### 4. 信徒たち——「世界を内側から聖なるものとする」キリスト者

教会とサレジオ家族に所属している信徒たちは、「世界を内側から聖なるものとする」献身的なキリスト者であり、今後ますますそうなってゆくでしょう。

第二バチカン公会議が提案した教会論を正しく注意深く眺めることによって、今日、特にキリスト者として、神によって創造された世界の現実において、聖と俗のあいだの二元論を受け容れることはできない（ましてや奨励することもできない）ことを宣言することができるのです。確かに二元論にもとづく流れは、「聖なるもの」あるいは宗教的なものとは対照的に、「世俗的なもの」の正当な自律性が十分に理解されていなかった時代に起こったものです。

キリスト教が誕生して以来、特に第二バチカン公会議以降、教会はキリスト者と彼らの住む世界との関係を明確に認識してきました。

私がおもうに、古代キリスト教文学の美しい作品である『ディオグネートスへの手紙』（紀元2世紀）の中に、この世におけるキリスト者の素晴らしい描写があります。

「キリスト者は、地域によっても言語によっても習慣によっても他の人びとから区別されることはありません。彼らは自分たちに独自の都市に住んでいるわけでもなく、自分たちの独自の言葉を使うわけでもなく、何か特別な生活を営んでいるわけでもないのです。この教えは詮索好きな人間たちの考えや思いつきにおいて見い出されるものではありません。また、ある人たちのように、単に人間的な教義の提唱者であると宣言することもありません。

しかし、キリスト者は、それぞれがくじで定められたとおりに、ギリシアの都市にも蛮族の都市にも住み、衣服の点においても、食物の点においても、その他の生活様式の点でも、その土地の習慣に従いながらも、彼らはその素晴らしい、自他ともに認める印象的な生活様式を私たちにを見せてくれるのです。キリスト者は市民として、あらゆることを他者と共有しながらも、外国人のようにあらゆることに耐えています。あらゆる異国の地はキリスト者にとって祖国のようなものであるとともに、あらゆる生まれ故郷は異教の地です。……中略……

一言で言えば、魂が肉体の中にいるように、キリスト者は世界の中で生きているのです。魂が身体のあらゆる部分を通して分散されてゆくように、キリスト者も世界のあらゆる都市を通して分散されているのです。……中略……」（註13）。

これは、私たちが提示しようとし、この『ストレンナ』のタイトル（表題）によって示した、キリスト者の生活と私たちサレジオ家族における「信徒の次元」を備えたキリスト教的な在俗主義を理解するために、『ディオグネートスへの手紙』は壮大で非常に有益なテキストなのです。

今日、ドン・ボスコのサレジオ家族は、国や文化や宗教に関係なく、どこにいてもよりよい世界を築くために、信者としての条件から出発して協力し、世のなかでパンだねとして生きるように召されています。教会は、この幅広い活動分野に、「信徒の召命の在俗的な性質」という名称を与えています。

「『教会憲章』第31項——信徒を特に特徴づけるものは、その在俗的な性質です……中略……。信徒は、その召命によって、現世の事柄に関わり、神の計画に従ってそれを秩序立てることによって、神の国を求めます。彼らはこの世に、すなわち、世俗的な職業と職業のそれぞれのつながりにおいて、またあらゆる職業において生きるのです。彼らは家庭および社会生活という通常の状態のなかで生きており、そこから彼らの存在のまさに網が編まれているのです。彼らは神によってそこに召され、福音の精神に導かれて、その本来の機能を発揮することによって、パンだねのように内側から世界を聖なるものとするために働くこ



とができるのです。このようにして、彼らは、特に信仰と希望と愛に輝く人生の証しによって、キリストを他の人びとに知らせることができるのです。したがって、彼らはあらゆる種類の現世的な事柄に緊密に結びついているので、これらの事柄が創造主と贖い主の讃美のためにキリストに従って生まれ、絶えず増大するように秩序づけ、それに光を当てるのが彼らの特別な任務なのです」(註 14)。

そして、このような信徒の状態はあらゆる人に共通するものであり、私たち全員が神の国に対する責任を分かち合っているということがわかるのです。

「神学的には、教会全体の世俗的な性質は、教会と世界の関係の意味と、共通の祭司職、預言職、王職の次元から理解されます。洗礼を受けた人は皆、神の救いの意志と神の国を現わすために世界に奉仕しなければならない教会の一員なのであり、たとえ、洗礼を受けた人がこの世俗性を特定の方法で行使したり展開したりしたとしても、それによって、任務や機能、そしてある程度までは世界、歴史、社会における『存在の仕方と状況』に多様性があることになるのです」(註 15)。

この「キリスト教的な態度」は、第二バチカン公会議に沿って(註 16)、社会に存在する方法としてどのようなものであるのかを理解することが重要であり、宗教があたかも明白で常に存在しているかのように、もはや当然視できない社会における教会の福音化と宣教活動のために進むべき道でもあるのです。

世俗の自律性を世俗の正当な一側面として理解し、神学は世俗の仕事の自律性と宗教者の神の国とを区別し、両者の現実の共存に対する正当な権利に関心を寄せています。言い換えれば、世俗性の正当な側面を強調するものであり、宗教的なものすべてを敵視する急進的な世俗化と結びついた「世俗主義」とは全く異なるものなのです。さまざまな「信条」を備える宗教は「生存権」および「市民権」とを備えています。第二バチカン公会議はこの点で、決定的なものです。

「今、私たちの同時代の人びとの多くは、人間の活動と宗教とのあいだの緊密な結合が、人間、社会、あるいは科学の自律性に対して働くことを恐れているようです。

もし、地上の事柄の自律性ということが、創造されたものや社会そのものが、人間によって徐々に解読され、利用され、規制されなければならない独自の法則や価値を享受しているという意味ならば、その自律性を求めることは全く正しいことです。それは単に現代人の要求というだけでなく、創造主の意志とも調和しているのです……中略……。

したがって、キリスト者のあいだでも時々見られる、科学の正当な自律性に十分に注意を払わないある種の心の習慣を嘆かずにはいられないのです……中略……。しかし、もしこの『現世の事柄の自律』という表現が、被造物は神に依存せず、人間はその創造主に一切言及せず、それらを使用できるという意味にとられると、神を認める者は誰でもその意味がい

かに誤ったものであるかがわかるでしょう。なぜなら、創造主がいなければ、被造物は消滅してしまうからです」(註17)。

キリスト教人間学は、過去と同様に今日も福音によって伝えられた価値と救いの呼びかけを世界のさまざまな社会と文化の言語に翻訳することを追求しなければなりません。それは人間の正当な自律性とキリスト教信仰の正当性、信憑性、首尾一貫性を調和させる課題なのです。これはキリスト者にとって、そしてドン・ボスコの家族としての私たちの使命における課題なのです。あらゆる人への尊敬、しかしキリスト者としての私たちの状態のための恐れと恥ということがらを、決して一緒にしないでください。

教会は、第二バチカン公会議の声を通して、日常生活を信仰生活から切り離すことは重大な誤りであることを私たちに思い起こさせています。

「私たちがここに住む都がないことを知っていながら、来るべき都を求める人たちは間違っているのです。彼らは、信仰そのものによって、それぞれが自分の適切な召命に従って、これらの義務を果たすことがこれまで以上に義務づけられていることを忘れているのです。それどころか、宗教は礼拝行為と特定の道徳的義務の遂行だけで成り立っていると考え、それが修道生活から完全に切り離されていることを暗示するような方法で地上の事柄に没頭できると考える人びとも、決して的外れな存在ではありません。

多くの人が公言している信仰と日常生活とのあいだのこの分裂は、現代のより深刻な誤りの一つに数えられるに値します」(註18)。

それは、キリスト教が神の創造した世界にもたらすわずかなパンだねなしには良くならない世界で、キリスト者として生きるということなのです。謙虚に、しかし信仰の価値を確信し、異なる社会や文化との対話のなかで、一方的な布教や押しつけの論理を捨て、周囲の人びとの生活の向上に貢献することができるのです。立派な牧者であり、文化との対話を心がけた内省の人であったカルロ・マリア・マルティーニ枢機卿の言葉を借りれば、「科学的、哲学的、神学的であろうと、解決策を押し付けてやり過ごすために信仰を振り回すことは、思想の前提としては苦しい暴力の源になる」(註19)のです。しかし、いつの時代でも、特に今日においても、キリスト者が、一貫性、証し、個人と共同体との信頼性を低下させる心地よい種類の安穏や「善行主義」を実践することは決して容認することができないのです。

そして、生地の中のパンだねがほとんど気づかれなないように、教会とより人間的で、より公正な社会、そしてより神の意志に沿った社会を築くための私たちの協力は、行われた善が私たちに帰結することよりも、善を行うことがより重要であることを考慮するよう私たちに求めます。最も重要なことは、たとえ「著作権なし」でも、社会と世界のために貢献することであり、効果的な行動を注目されることと混同せず、また、他の人が行った善は少な

くとも私たちの善と同じように善であることを認識することです。もし納得がゆかないなら、福音書の一節をもう一度読んでみましょう。主は、たとえ「自分たちのグループ」でなくても、他人が行う善を止めようとした弟子たちを正しています。

私たちは、他者をつつみこむ信仰者として現実を解釈し、他者や文化やメディアや知識人、そして自分と異なる考えを持つ人びとや自分と対立する人びととの対話を促進することを実践しなければならないのです。

これらは、私たちの世界でのあり方が要求する徳の高い習慣であり、世界と物事を理解するために私たちがもたらすことのできる「キリスト教的でサレジオ的な態度」なのです。

この態度によって、私たちは他の奉献生活者、他の聖職者、他の信徒、他のキリスト者、他の宗教の男女との関係をつむぐことができるようになるのです。これが、「パンだね」として内側から世のなかを聖なるものとするために働く「良い方法」なのだと思います（註20）。つまり、「教会における聖性への普遍的な呼びかけ」と調和するようなやり方です（註21）。そして、教会は超越的な次元と内在的な次元の二重の次元で世界とかかわっているのです、あらゆるキリスト者は人類の歴史にすでに存在している神の国のしるしでなければなりません。敬虔と献身、祈りの生活、ミサ聖祭を深める生活がこの聖性の超越的な側面を強調するなら、正義と人間的な兄弟愛への社会的な協力は、私たちにとって内在的なキリスト教の側面を強調するものなのです。ドン・ボスコのように、私たちは地に足をつけながらも、天を見つめて生きています。この点に関して、私たちサレジオ家族の有能なメンバーは、世界とドン・ボスコ家族の信徒としての彼自身の重要な考察を私たちに提供し、教会とドン・ボスコ家族の信徒を、キリスト、教会、世界という三つの帰属を備えた男女と定義していません（註22）。

教皇フランシスコは、アルテミデ・ザッティの列福式で私たちが行った美しい会談で、彼を「あらゆる貧しい人々の近親者」として紹介し、人びと、特に若者を今日の世界で活躍することに備えさせる心の教育者となることが、私たちサレジオ会員の召命の一部であることを思い起こさせました。

「こうして病院は『父の宿』となり、人間性と恵みの賜ものに富み、神と兄弟姉妹への愛の戒めの家、救いの誓約としての健康の場であることを求める教会のしるしとなったのです」。これがサレジオの召命の一部であることも事実です。サレジオは心の、愛の、愛情の、社会生活の偉大な教育者であります」（註23）。

サレジオ家族のなかで生きている信徒のカリスマの贈りものを教会と世界にもたらすことは、しるしおよび証人として、対話のなかで、そして共通善のために私たちが何者であることを謙虚に奉仕することによって存在するよう導く職業的な応答です。

それは、多くの場合、家庭における具体的な召命と世界における専門的な役割を通過する信徒生活そのものから、またそのなかで、信徒、特にキリスト者、ドン・ボスコの家族の信徒は、社会と歴史のなかで福音の価値を確立し、促進し、支え、今ここで神の国を確立するために、世界を聖別すること（consecratio mundi）に貢献するよう召されています。

昨年、聖フランシスコ・サレジオ没後 400 年を記念して行われた祝典を終えたばかりですが、彼は一人ひとりの召命の偉大さに光を当てることができる、教会の歴史のなかで最もユニークで実りある預言者の一人です。彼が自ら伴走したあらゆる社会的な背景をもつ数多くの信徒たちが、主によって置かれた庭で花開き、完全に聖なるものとなるように助けたのはそのようなことでした。聖フランシスコ・サレジオは、どのような生活状況であれ、自らを「サレジオの者」と認める人びとにとって、常に新しく、かけがえのないインスピレーションの源であり続けています。

教皇フランシスコが聖フランシスコ・サレジオのカリスマに言及しつつ、修道家族の全員に授けた最近の使徒的書簡において、ジュネーブの聖人がその時代に提案し、今日も信徒のための神学を究める際の話題となっている霊性の重要性が強調されています。

「献身を扱ってきたほとんどの人は、世間から隔絶された人々に教えることに関心を持ち、少なくとも、この隔絶をもたらすような種類の献身を説いてきたのです。私は、都市で、家庭で、宮廷で、その身分ゆえに社会の都合で他人のあいだで生活せざるを得ない人びとに、自分の教えを提供しようと思っています」（註 24）。

このため、献身を世間の荒波から保護された状態と考えたり、この世とは異なる領域に追いやるべきであるなどと考える人びとは、非常に間違っています。むしろ、献身は、どこにいようとも、すべての人のものであり、すべての人のためにあり、誰もが自分の召命に従ってそれを実践することができるのです。教皇聖パウロ六世は聖フランシスコ・サレジオの生誕四百年祭で次のように書いています。

「聖性は、ある集団や他の集団、あるいは特定の個人の特権ではなく、キリスト者という名を持つあらゆる人に向けられた招きであり命令なのです。『友よ、より高く登れ』。すべての人は、同じ道を通るわけではありませんが、主の山に登るようにと定められているのです。紳士と職人、使用人と王子、未亡人、若い娘や妻では、献身の実践は異なるはずですが、それぞれに、それぞれの体力、状況、義務に合わせなければなりません」（註 25）。

世俗的な都市を横断し、自己の内面に目を向け、完璧を求める欲求をあらゆる生活状態と結びつけ、世間から切り離さず、そこに住み、感謝し、また世間から正しい距離をとる方法を教えてくれる中心を見い出すことが大事です。

これが公会議のテーマである聖性への普遍的な呼びかけです。

「『これほど多くの、これほど強力な救いの手段によって堅固にされたすべての信徒は、その条件や状態がどうであれ、主によって、父ご自身が完全であられる完全な聖性へと、それぞれ自分のやり方で召されている』(LG 『現代世界憲章』 11)。『それぞれのやり方で』と公会議は言っています。『私たちは、達成不可能に見える聖性の例を前にして落胆してはならない』と」(註26)。

母なる教会は、私たちが模倣しようとするためではなく、主が私たちのために設計されたユニークで具体的な道を歩むよう私たちを駆り立てるために聖なる生き方を提供するので、「重要なのは、各信者が自分の道を見極め、神が自分の中に置かれた個人的なものを、自分の中で最大限に引き出すことです」(1 コリント 12・7 参照) (註27)。

教会は、この言葉の本来の意味に従って、教会を特徴づけるあらゆる召命の豊かさのおかげで、「召された者たちと共に」生きているのです。**あらゆる召命は他のすべての召命への奉仕であり、自らを捧げることによってのみ、人は自分の完全なアイデンティティを表現し、取り戻すことができるのです。**贈られた賜ものは集団のための私的で排他的な財産などではありません。洗礼を受けた個人として、私たちは皆、キリストの祭司職ばかりか、仕え、いのちを与えるために来られたキリストの預言職と王職までも分かち合っているのです。聖職に就くことは、すべての信徒の共通の祭司職への奉仕としてのみ理解されます。同様に、信徒の状態の典型的なものは、キリストの一つのからだの他のすべての構成員の生活と召命に組み込まれるすべての人のための贈りものです。従って、「世俗的な次元」は奉獻生活や聖職に就く者にも共有されています。ドン・ボスコの物語はこのことを見事に証明しています。ドン・ボスコはトリノ教区の司祭であり、奉獻生活者の修道会を二つ、信徒会を二つ設立しました。そして、それらのすべてにおいて、また他の多くの人びとのかかわり方において、彼は自分が生きている「世界」に非常に深く入り込み、何十万という若者の生活と課題に没入し、大きな困難と国境を恐れずに克服し、その実りは国や文化や宗教の相違を超えて、今日何百万もの人びとに感銘を与えてつづけているほどなのです。

キリスト者であり、信徒であることは、世俗的な信徒の才能の強さを最大限に生かし、信仰と希望と慈愛に生かされた世界に生きる人々に開かれた無限の可能性の富にそれを託す道を開くのです。第二バチカン公会議はこのことを明確に宣言しています。

「『教会憲章』31項 [信徒の定義] ——ここれ言われている信徒とは、聖なる叙階を受けた者ならびに教会において認可された修道身分に属する者以外の、すべてのキリスト信者のことです。すなわち、洗礼によってキリストのからだに合体され、神の民に組み込まれ、自分たちのあり方に従って、キリストの祭司職、預言職、王職に参加する者となり、教会と世界のなかで、自分たちの分に応じて、キリストを信じる民全体の使命を果たすキリスト信者のことです。信徒に固有の特質は、世俗に深くかかわっているということです。聖なる叙

階の成員は、時には世俗のことに携わり、されには、世俗的職業に従事することもできるが、その特殊な召命としては、主としてまた本来、聖なる奉仕に秩序づけられています。また修道者は、その身分をもって、真福八端の精神なしには世の姿を変えることも、世を神に奉献することもできないことを示す明白かつ優れたあかしとなっています。これに対して、信徒に固有の召命は、現世的なことがらに従事し、それらを神に従って秩序づけながら神の国を探し求めることです。信徒は世俗のなかに生きています。すなわち、世の個々のそしてあらゆる務めと仕事に携わり、家庭と社会の通常的生活条件のなかで生活するのであって、彼らの生活は言わばそれらによって織り成されています。**彼らはそこに神から招かれているのです(註28)。それは、自分自身の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパンだねのように内部から働きかけるためです。**こうして信仰・希望・愛の輝きをもって、とくに自分の生活のあかしを通して、キリストを他の人びとに現わすのです。したがって、彼らが密接にかかわっているすべての世俗的なことがらが、いつもキリストに従って行われ、発展し、創造主とあがない主の讚美になるよう、それらすべてに光を当て方向づけることは、特に彼らに託された使命です」(註29)。

信徒の存在が変容させ、他の誰にもできない神の国の「練り」となることができる人生のすべての領域と現実を定義することは、この『ストレンナ』による説明だけで扱いきれるようなものではありません。いずれにせよ、教会において信徒は広範で複雑な可能性と課題を備えており、彼らが直面している状況は、同時に「地の塩」および「世の光」となることを願う人びとへの数多くの呼びかけのようなものです。それは、今年の『ストレンナ』が私たちを招き、促し、勇気を持って、そして寛大に私たち自身の旅を再開させ、教会自身が述べる呼びかけをタイムリーに実現するものなのです。

「信仰の目は素晴らしい光景を見つめます。それは、日常生活と活動に忙しく、時には視界から遠く離れ、世間から全く認められていない、世の偉人からは知られていないが、それでも御父からは愛情をもって見守られている、主のぶどう園で働くたゆまぬ労働者、女性や男性の無数の信徒たちの姿です。神の恵みの力によって確信し、揺るぎないものとなった彼らは、歴史における神の国の謙虚かつ偉大な建設者なのです」(註30)。

今日のサレジオ家族に所属するあらゆる信徒たちにとって、またそれぞれの召命を支え合っておたがいに補い合うことによって日々豊かに生きる奉獻男女にとって、世界、社会、経済、政治、他者のための社会活動、日常生活におけるキリスト教な生活は、神との出会いをふりかえる神学の間であり、常にそうでなければならぬことは疑いの余地がありません。

「彼ら(信徒)自身の伝道活動の間は、政治、社会、経済の広大で複雑な世界であり、また、文化、科学、芸術、国際生活、マスメディアの世界でもあるのです。また、人間の愛、家族、子供や青少年の教育、専門的な仕事、苦しみなど、福音化のために開かれている他の

現実も含まれます。福音に感化された信徒がこれらの現実に関わり、明確に関わり、それを促進する能力を持ち、しばしば埋没し窒息しがちなキリスト者の力を最大限に発揮しなければならないことを自覚すればするほど、これらの現実には神の国、すなわちイエス・キリストにおける救いに奉仕するようになるのです。このような現実には、人間的な内容を失ったり犠牲にしたりすることなく、むしろ、しばしば軽視される超越的な次元を指し示し、神の国の建設、ひいてはイエス・キリストにおける救いのために役立つものであることを見いだすでしょう」(註31)。

## 5. パンだねとなるように召されたドン・ボスコの家族

ドン・ボスコは、多くの人びとを巻き込み、若者の救いという同じ夢のために、積極的で意欲的な気性に富んだ働き手にすることができました。ジュリオ・バルベリス師は、最初の宣教師たちがパタゴニアに出発してからちょうど5ヶ月後の1876年3月19日、つまり聖ヨセフの祝日の晩に、オラトリオの若者たちに対して語りかけたドン・ボスコのことばを注意深く記録しています。ドン・ボスコは福音のたとえ話に出てくる畑やぶどう畑に言及し、農民生活の個人的な経験の強みを活かして、ヴァルドッコの若者たちが、神の国の成長において、誰もが常に貴重で重要な役割を果たすことができることを理解できるよう手助けしているのです。それは、世俗的、福音的、そして教会的な例として、私たちが、それぞれの人生の物語、能力、召命に従って、才能を共に実らせるように召されていることを示すものです。このように、バルベリス師は、私たちにとって神学的に最も重要であると思われるであろうドン・ボスコの言葉を書き遺したのです。

「収穫とは魂の救済であり、すべての魂は集められ、主の穀倉に運ばなければならないからである。すべての人が救われるようにするには、どれほどの仕事が必要であろうか。

主のぶどう園で働く労働者というのは、魂の救済のために何らかの形で働くすべての人びとを意味します。そして、ここでいう労働者とは、ある人たちが信じているように、司祭、説教者、告白者だけを意味するのではないことによく注意してください。彼らはたしかに働くために置かれ、収穫を集めることに直接関わっていますが、彼らだけでは十分ではありません。労働者とは、魂の救済のために何らかの働きをしている人たちのことです。

畑を見ると、いろいろな人が働いているのがわかります。ある人は耕し、ある人は土をひっくり返し、ある人は鍬を使い、ある人は熊手を持って、あるいは土の塊を割って平らにし、ある人は種をまき、ある人はその上に覆いをし、ある人はダーネル、草、つる草を抜き取り、ある人は鍬で、ある人は根を張りめぐらせ、ある人は切り、ある人はタイミングよく水をやり、種に圧力をかけているのです。ある者は刈り取り、束を作り、ある者は荷車に積んで引っ張り、ある者は小麦を広げ、ある者はそれを叩き、ある者は小麦と穀類とを分け、ある者は掃除し、ふるいを使い、袋に入れ、粉にするために製粉所に運び、ある者はふるい、ある者はこね、ある者は焼くのです。

このように、収穫が天からのパンを与えるという目的を果たすためには、さまざまな労働

者が必要であることがおわかりいただけると思います。畑でもそうであるように、教会でもそうです。あらゆる種類の労働者が必要なのです。誰も次のように言うことができません。私の行いは申し分ないのですが、神のより大きな栄光のために働くことはできないでしょう。いいえ、誰もそんなことは言えません。誰もが何かをすることができるのです」(註32)。

私たちは、異なる社会的背景、生活状況、職業的経歴を持つ人びとの共同体の一員として、カリスマに満たされて生まれたのです(註33)。これが、1841年から1859年までの創立当時のオラトリオの性質です(18年間の歩みそのものです!)。これは、より危険にさらされている若者を「善良なキリスト者でありつつもまっすぐな市民」にまで育てあげるためにさまざまな方法で協力する神の民の協力関係の相乗効果を今でも強く反映しています。私たちが神の民の生き方を深める集団として生まれたことは否定できません。それが私たちのカリスマと使命の本質なのです。

私は、特に明白な事実をよく知っています。そしてこの認識を私たちサレジオ家族全体に伝えようとしています。ただひたすら相手と共に、ただひたすら交わりのなかで生きることによってのみ、今日、何か意味のあることを成し遂げることができるのです。

私はサレジオ会全体に、信徒と分かち合う使命について強く訴えかけました。ドン・ボスコの家族全体にとって役立つからです。そして、私の呼びかけに耳を傾けないサレジオ家族の関係者がいるとするならば、そう遠くない将来に、危険におちいるとともに、もはや引き返せないほどの困難な地点に取り残されることになるでしょう。

私は言ったのです。

「私たちの第24回総会は、確かに第二バチカン公会議における『交わり』の教会論に対する教会の聖職者および信徒たち男女によるカリスマ的な応答でした(註34)。私たちは、ドン・ボスコがヴァルドッコでの使命の当初から、数多くの信徒や友人や協力者を巻き込み、彼らが若者のあいだで彼の使命の一部となれるようにしたことをよく理解しています。なぜなら、**もはや引き返すことのできない地点**でドン・ボスコの行動と一致することに加え、第24回総会が提案する信徒と分かち合う宣教のモデルは、事実、「現在の状況において唯一実行可能なモデル」だからです(註35)。

このように、私たちは、教皇フランシスコの導きによって教会が歩んでいる道と完全に調和し、ドン・ボスコのカリスマのために未来に新しい地平を開くこの宣教、養成、共同生活のスタイルに入ることを決意した人、またこれから決意する準備をしている人のためにも、**もはや引き返すことのできない地点**があることを述べておきます。それは確実に預言的であるとともにも模範的なものなのです。



同時に、この敷居を越えることができず、また越えようとせず、自己だけで独りごとをつぶやいて孤立した状態に閉じ込められたままの人びとには、別の危険でリスクの高い**戻れなさ**もあります。そのような人びとは、サレジオ的な存在の仕方および生き方さらには解釈の仕方において、もはや時代にそぐわず、年を追うごとに若者たちとは無関係となり、絶滅する運命にあるのです。

ドン・ボスコの使命の究極の目標は、若者の救いを目指すとともに、社会をも変革することです。ドン・ボスコの広範で勇敢な視野、疲れを知らない勤勉さ、障害に直面したときの回復力……は、この世界規模の社会変革と若者の福音化の視野があって初めて説明できるものです。

ドン・ボスコは政治に関与しませんが、政府のさまざまなレベルのあらゆる代表者と話すことができる人でした。それは、彼の献身が若者のために透明な方向性を持っているからです。人間社会と他者への奉仕、つまり公共事業がすべての人のためにあり、またそうであるべきであるように、という点に関心を持つ人は、これに対する無関心を装うことなどはできないものなのです。

ですから、私たちの共通の声は、今日、私たちにカリスマとして与えられた、そして、私たちがドン・ボスコの家族としてのみ共に達成できる若者への憧れの熱意を体現するなら、告別式の境界をはるかに超えて、相手との接点を見つけ、耳を傾けることができるようになるのです。

**ドン・ボスコ家族におけるメンバー一人ひとりの召命を深めて、お互いに補い合うことは、サレジオ家族としてお互いに結ばれるとともに、私たちと出会って何らかの影響を受ける世界中の数多くの信徒たちと結ばれて、自分たちの果たすべき使命と養成に共に取り組むことは、今日、そして将来においても、相手と無関係でありたくないなら、避けられない要求となるのです。**

そして、家族的な精神と広大なサレジオ家族の運動のなかでの交わりは、私たちが貴重な遺産として受け継いでいる偉大な贈りものなのです。

## **6. 美しい実をつけた大木のこかげで**

サレジオ家族の列福および列聖を推進するための第二回目のセミナーの終わりに、私は手紙のなかでこう書きました。

「ドン・ボスコから現代に至るまで、私たちが注意を払うべき聖性の伝統を認めています。なぜなら、彼に起源をもつカリスマの受肉は、人生のさまざまな状態、さまざまな形態で表

現され、それは男性と女性、若者と成人、奉献生活者と信徒に関する課題だからです。時代と場所によって異なる歴史的、文化的、社会的文脈のなかで、サレジオのカリスマの特別な光を輝かせ、信者と善意ある男女の生活と共同体に効果的な役割を果たしつづけることで霊的な遺産を体現した司教や宣教師たちです」(註36)。

謙遜と深い感謝の念をもって、私たちはサレジオ家族のなかに、聖なる実りをたくさんつけた偉大な木を認めます。これらの人びとは、イエス・キリストとその福音に忠実な愛のパンだねとなることで人生を満たしてきた男女、若者、大人たちなのです。

私たちがよく知っているように、それぞれの人の召命は共通の洗礼という根源を持ち、神の民全体の成長に貢献するように運命づけられていることを教会論の内容が示しています。

「教会共同体においては、生活の諸状態は互いに秩序づけられており、それゆえ、互いに結びついています。それらは、それぞれを際立たせる基本的で紛れもない性格を持ちながら、同時に、それぞれが他者との関係のなかで眺められ、互いに奉仕する立場に置かれているという意味で、異なっていながらも補完し合っているのです」(註37)。

この教会論的な視点は、各自の召命および使命が、異なる呼びかけを受けた者たちがお互いに支え合って補い合うことで共に生きるときに、まさにサレジオのカリスマが完成することを示しています。まさにこれがサレジオ家族が存在していることの深い意味であるはずです。つまりサレジオ家族とは、若者の救いのための広大な使徒的運動なのです。

私たちの家族の173人の聖人および福者および尊者および神のしもべのうち、25人が家庭で、サレジオの家で、世俗生活で、職場で、つまりキリスト者としての証しの特権的空間で、そして異なる社会、歴史、文化の文脈でサレジオのカリスマを体現した信徒であることは興味深いことであります。この『ストレンナ』の解説をとして、彼らを証しびととして思い起こすことは非常に適切なことだと思います。

- 聖ドミニコ・サヴィオは、10代で若者の聖性を表現し、予防教育の恵みの実りを結び、後続する若い聖人たちの長い列のリーダー的な立場の人物です。
- 福者ラウラ・ヴィクターニャは、10代で、いのちを捧げる愛の強さを証しし、傷ついた家族の現実を思い起こさせます。
- 福者セフェリーノ・ナムクラーは、マプチェ族の若者で、先住民の文化の価値と尊重、信仰とカリスマのインカルチュレーションの仕事の思い起こさせます。
- 福者フランシスコ・ケスイ、チェスワフ・ヨチヴィアク、エドワード・カチミエスキ、エドワード・クリニク、ヤルグニエフ・ヴォイチェホフスキという、ポズナンのオラトリオの殉教者たちは、信仰の証人の生きかたを示しました。

- スペインの迫害のもとで福者となった殉教者たちと私たちは出会うことができます。アレハンドロ・プラナス・サウリとフアン・デ・マタ・ディエスは信徒協力者、トマス・ジル・デ・ラ・カル、フェデリコ・コボ・サンス、イギノ・デ・マタ・ディエスはサレジオ会員になることを望む志願者、バルトロメ・ブランコ・マルケスは信徒で結婚予定者、テレーサ・セジュード・レドンドは妻および母親として誠実に生きること、教会や社会や諸団体で活躍するサレジオ家族の長所を表明しました。
- 福者アレクサンドリナ・マリア・ダ・コスタは、サレジオ会の協力者、協力の最高の形、イエスの贖いの情熱との一致を思い起こさせます。
- 福者アルベルト・マルベリは、リミニのオラトリオの元学生で、社会と政治の世界に従事していました。
- 尊者マンマ・マルゲリータ・オッキエナ (Mamma Margaret Occhiena) はサレジオ家族のカリスマの原点である母性的な女性的存在です。
- 尊者ドロテア・チョピテアは、妻であり母であり、サレジオのカリスマを「歓迎」し、成長させ、貧しい生活の選択と貧しい人々から伝道される能力を現しました。
- 尊者アッティリオ・ジョルダニーは、夫であり父親、家庭で、仕事で、オラトリオで、宣教地で、サレジオの喜びを体現しています。
- ロドルフォ・ランケンベイン神父とサレジオの使命を分かち合い、あらゆる文化と伝統に存在する真理の種を認め、歓迎する必要を思い起こすインド系ポロロ人の神のしもベシマオンも思い出しましょう。
- 神のしもベマティルデ・サレムは、妻であり恩人、シリアにおけるカリスマの実りのために財産と命を捧げ、キリスト者間の交わりの強さと、他宗教の信仰者との共存の能力を証しています。
- 神のしもベアントニーノ・バグリエリは、ドン・ボスコのボランティア、病気のと看、福音のパンだねとなる方法を知っていました。
- 神のしもベベラ・グリタは、サレジオ会の協力者、教師、聖体の恵みを実らせるためにすべてのキリスト者に約束する神秘的な働きの道具となりました。
- 神のしもベアカシ・バシルは、パキスタンの若い元生徒で、兄弟姉妹のためにいのちを捧げました。

これらの多種多様な聖性の人物のなかで、私は、信徒の聖性の重要かつ独創的な証しを提供してくれる人物を挙げたいと思います。それは、私の考えでは、異なる文脈、異なる世紀、異なる職業で生きた信徒の生活の多面的な側面、すなわち、側面、形、色が豊かであり、しかし日常生活の中で単純な聖性に満ちていることを示しているのだと思います。その「隣の」世俗的な聖性は、発見することで常に私たちに多くの利益をもたらしてくれるでしょう。彼らの生き方を熟考するために、しばし立ち止まりましょう。

#### - 「マンマ」(おかあちゃん) と呼ばれているマルゲリータ・オッキエナ

オラトリオの初めのころ、ドン・ボスコは、どうすれば困難から抜け出せるかを何度も考え、カステルヌオーヴォの教区司祭に相談し、自分の必要性と恐れをさらけ出したことを私たちは知っています。教区司祭は迷うことなく、「お母さんがいるじゃないか、一緒にトリノに行けばよいさ」と答えました。1846年11月3日、マンマ・マルゲリータはヴァルドッコに到着し、10年間、何百人もの少年たちの母親となったのです。1846年当時はオラトリオだけが開かれていて、少年たちは特に日曜日にそこに集まってきました。伝記によると、少なくとも800人が来ていたということです。一週間を通して、毎晩、街での仕事が終わると、若者たちは夜の授業にやってきました。その騒音と叫び声は想像に難くないものです。授業に参加する生徒たちはドン・ボスコの台所と寝室、聖具室、聖歌隊、礼拝堂を占拠したのです。声や歌が鳴り響き、頻繁な出入りがありましたが、しかし、うるさい生徒たちを伸びやかにさせておかなければなりません。マンマ・マルゲリータは彼らと一緒にいました。確かに神父や一般人もドン・ボスコを手伝いに来たまし、後で女性も何人か手伝いに来たのです。しかし、マンマ・マルゲリータだけは、いつも、フルタイムで、そこにいました。そのため、彼女は誰からも愛され、彼女を知る人たちから尊敬を受けました。トリノに来た当初から、周囲の近郊の人びとにも知られるようになると、彼女は「マンマ」以外の名前で呼ばれることはなかったほどです。

ここで、10年間を過ごすことで、彼女の人生は息子の人生とサレジオ会の活動の始まりと融合したのです。彼女はドン・ボスコの最初の主要な協力者であり、彼女の活発な親切は予防システムの母性的な要素を定めたのです。彼女は文字の読み書きができませんでしたが、天から降ってくる知恵に満ちていたのです。彼女はまた、貧しいストリートチルドレンや誰の子でもない子どもたちを親身になって助けたのです。彼女は神を第一に考え、貧しさと祈りと犠牲の生活のなかで神のために自分を使い果たしました。

#### - 若き万能のキリスト者としてのバルトロメ・ブランコ・マルケス

「私は労働者であり、労働者である両親のもとに生まれました。私は、下層階級が働く狭い環境で生きてきたし、今も生きています。貧困のなかで生まれ、労働者の服を着て、荒れた手をしているから、彼らとは違うのだ、と考える人たちに対する抗議が、私の血管を駆け巡り、時に若い情熱の炎によって悪化しているのを感じます。しかし、私たちの考えをはっきりさせましょう。私は労働者であり、カトリック教徒なのです」。1933年11月5日、ポソブランコ(スペイン)の人民行動集会で、このように語ったのは、19歳の青年で、職業は椅子製造業に携わる椅子職人であった。

1914年12月25日、ポソブランコ(スペイン、コルドバ)に生まれ、いわゆる「スペイン風邪」の流行で母親を失いました。12歳で父を亡くした彼は、学校をやめ、椅子職人として働き始めなければならなかったのです。1930年9月、サレジオ会員がポソブランコに到着すると、バルトロメはオラトリオに通い、カテキスタや指導者として手伝いました。彼

はアントニオ・ド・ムイニョ師という指導者を見つけ、研究会に参加することによって知的、文化的、靈的な養成を続けるようにと勧めました。バルトロメが早すぎる死を迎えるまで、このサレジオ会員が彼の告解者であり靈的指導者でした。バルトロメは、その創意工夫、使徒的献身、指導者としての態度から、親族、友人、仲間から高く評価されました。その後、カトリック・アクションに入り、そこで幹事を務め、全力を尽くしました。マドリードに移り、社会福祉士養成所 (Istituto Sociale Operaio) で労働者の使徒職を専門とし、雄弁家で、社会問題の研究者としても際立った存在でした。奨学金を得て、社会事業研究所が企画した旅行を通じて、フランス、ベルギー、オランダのカトリック労働者の組織について学びました。コルドバ州のカトリック労働組合の代表に任命され、八つの団体を設立しました。

1936年6月30日に革命が勃発すると、バルトロメはポソブランコに戻り、街の防衛のために「市民兵」としての任務に身を任せたが、1ヵ月後にもう一方の派閥に降伏してしまったのです。謀反の疑いをかけられた彼は、牢獄に入れられたましたが、そこで模範的な態度をとり続けました。「殉教に値する者は、殉教者として神に身を捧げなければならなりません」。9月29日、彼はハエン (Jaén) で裁判にかけられ、死刑を宣告されました。判決の後、彼は冷静さを保ち、威厳を持って自分を守りながら、こう言ったのです。「あなたは私を傷つけると信じていたが、代わりに私のために王冠を刻んでくれたので、私のためになっている」と。

死の前夜、彼が家族と婚約者に宛てた手紙は、その明確な証拠です。「赦し、赦し、赦し、赦し。私を傷つけようとした者には善をもって報いるという、キリスト者としての復讐をお願いします」と叔母や従兄弟に宛てて書いているからです。

そして、婚約者のマリヤにも手紙を書きました。「いま、この瞬間にも増している私たちの愛に免じて、あなたの魂の救済を第一の目的として、私たちが天国で永遠に、誰にも引き離されることなく会えるように」と。

囚人仲間たちは、彼が死に向かって旅立つときの感動的な詳細を記録していました。彼はキリストにもっと似る者となるために、裸足になりました。手首に手錠をかけられた時、彼は手錠をかけた民兵の手にキスをしました。彼は、彼らが提案したように、背中を撃たれることを受け容れませんでした。「キリストのために死ぬ者は、前を向き、胸を張って死ななければならない」と彼は言ったからです。「キリスト王万歳！」そして、彼は両手を広げて十字架の形になり、檜の木の横で弾丸にまみれながら倒れました。1936年10月2日のことでした。彼はまだ22歳になっていませんでした。彼は2007年10月28日にローマで列福されました。

#### - 「ドン・ボスコのような」信徒アッティリオ・ジョルダーニ

1913年2月3日ミラノに生まれた彼は、幼いころからサレジオ会聖オーガスティン修道院への大きな情熱と、すでに18歳のとき、そこに通う若者たちへの献身で際立った存在でした。何十年ものあいだ、彼は勤勉なカテキスタであり、とても素朴で喜びのある、絶えず

輝かしい指導者でした。彼は、典礼、養成、ゲームの自由時間、演劇の世話をしました。彼は心から神を愛し、秘跡生活、祈り、霊的指導の中に恵みの生活のための資源を見いだしました。1934年に始まり1945年に段階的に終了した軍務のあいだ、彼は戦友たちのもとで使徒的な対応を示しつつづけました。彼はミラノのピレリ社に勤務し、喜びとユーモア、そして強い責任感を広めました。1944年5月6日、彼はカテキスタのノエミ・ダヴァンゾと結婚しました。二人のあいだには三人の子供が生まれました。ピエール・ジョルジョ、マリア・グラツィア、パオラです。家族のなかで、彼は夫であり父親でした。偉大な信仰と穏やかさに富み、最も貧しい人びとのために緊縮財政と福音的な貧しさを選択しました。家族からは何も奪うことなく、彼はオラトリオを第二の家族とし、その豊かな創意工夫と並外れた教育技術を若者たちのために役立てました。妻のノエミと同意の上で、彼は自分の子どもたちが選んだ宣教の道を共に歩むために、マトグロッソ（ブラジル）へと旅立ちました。1972年12月18日、ある集会で、他人のために自分のいのちを捨てる義務について熱く熱く語った後、突然、自分の体が挫折するのを感じた。間一髪のところ息子に「ピエール、お前が続けろ」と言い残し、心臓発作で息を引き取りました。2013年10月9日より名誉称号が授けられました。

使徒的に献身したキリスト者としての彼の人生は、（これらはすべて彼の言葉です）発見するために、そのような決意と個人的な指向を帯びていたのです。「キリストに仕える喜び」、「良い人のためだけに良い人にならない」、「世のなかに属さずに世のなかで生きる」、「流れに逆らう」、「求めずに、与える」、「自分が生かしたいものを生きることが必要である」。これらの言葉は、10代の頃、若い兵士の頃、そしてギリシャ・アルバニア戦線の兵士の頃と、彼の人生のさまざまな現場で熟成した価値観なのであり、それは彼の「戦争日記」にも登場している。婚約者のノエミ・ダバンゾの選択も、彼女が手紙に書いているように、信仰の理由にもとづいていました。「主があなたを連れてこられた時、あなたの愛と、救い主に特に愛されている人々への献身の精神を私の前に置かれました。これが、あなたを私の伴侶にしようと思わせる大きなきっかけとなりました」と。

アッティリオの信仰は、まさに神の存在の「しるし」というにふさわしいほど偉大なものでした。家族のなかで、オラトリオのなかで、教区の共同体のなかで、そして彼に会う人びとのために生きた彼の生き方からわかることは、信仰とは、宣言される以上に、彼自身の行動やあり方を通して輝きを放っていたことです。「私たちの信仰の深さは、私たちの存在のなかに現れているのです」。

#### - 「小さな先生」としてのヴェラ・グリータ

1923年1月28日にローマで生まれた彼女は、サヴォーナで暮らし、学び、教員免許を取得しました。21歳のとき、突然の空襲（1944年）に遭い、逃げ惑う群衆に圧倒されて足元をすくわれ、身体的にも深刻な影響を受け、それ以来、彼女は永遠に苦悩を背負うことになりました。彼女はその短い生涯を人知れず過ごし、リグーリア内陸部の学校で教え、その親

切で柔和な人柄で皆から尊敬と愛情を受けました。彼女はサヴォーナのサレジオ会のマリア・ヘルプ・オブ・クリスチャン教区のミサに出席し、ゆるしの秘跡を定期的に受けていました。1967年以來、サレジオ家族の協力者として、彼女は主に自分自身を完全にささげることで召命を遂行しました。主は並外れた方法で、心の奥底に「声」と「ことば」を与え、それによって「生きた幕屋のわざ」を彼女に伝えてくださったのです。ヴェラ・グリータは、神の恵みの衝動のもと、霊的指導者の仲介を受けながら、神の贈りものに応え、絶えず病気で疲れていた生活のなかで、復活された方との出会いを証しし、生徒の指導と教育に英雄的な寛大さで身を捧げ、家族の必要に応え、福音的な貧しさの生活を証しました。1969年12月22日、46歳のとき、ピエトラ・リグレの病院の一室で死去しました。

ヴェラ・グリータは、特に晩年に顕著になった御聖体への熱意をまず第一に証していました。彼女は、プログラムや使徒的な主導性、プロジェクトといった観点で考えることはありませんでした。むしろ、彼女は、イエス自身が彼女の人生を自分のものにするほどまでに、熱意をもって生きつづけ、そのような基本的な方向づけを受け容れました。今日の世界において彼女は御聖体に対する深い信頼の大切さを証明しています。

彼女の日々の激しい労働を通じた旅は、聖性に関する新しい信徒の視点をも提供しています。「貧しさ」、「虚弱さ」、「病人のための回心」を深めることで現実を受容しつつ、この世の生活を聖なるものとする模範となることです。

サレジオ家族の協力者として、ヴェラ・グリータはサレジオの強い感性で生き、働き、教え、人びとに出会いました。その控えめだが効果的な生き方とおして現れる愛に満ちた親切さから、子どもや家族に愛される能力まで、絶え間ない笑顔で行った親切な教育法から、あらゆる不都合にもかかわらず、最も小さい人、小さい人、遠い人、忘れられた人に優先的に目を向ける寛大な覚悟まで、神と神の栄光への寛大な情熱から、病気のあいだ、すべてを奪われながら十字架への道へ邁進したのです。

#### -不屈の精神を生きる平和の証しびととしてのアカシ・バシル

ドン・ボスコ技術学院の卒業生である彼は、列福と列聖が進行中の最初のパキスタン人です。2015年3月15日、彼はパキスタンのラホールのキリスト教地区であるユーハンナバードの聖ヨハネ教会で自爆テロによる大虐殺を防ぐために自らを犠牲にしました。アカシ・バシルは20歳で、ラホールのドン・ボスコ技術学院で学び、警備ボランティアになっていました。

最も印象的なのは、この純朴な青年がいかにして悪に立ち向かい、殺人的な暴力と闘う強さを発揮したかということです。彼が死ぬ前に爆弾魔に言った言葉としての「私は死ぬが、君を教会に入れさせない」という呼びかけは計り知れない愛を証しする強い信仰と英雄的な勇気を表しているのです。その四旬節第4主日（2015年3月15日）の福音は、ニコデモに語ったイエスの言葉を宣べ伝えています。「悪を行う者はみな、光を嫌い、その行いが露見しないように、光に近づこうとしない。しかし、真実を行う者は、その行いが神にあっ

て行われたことがはっきり分かるように、光の前に出てくる」(ヨハネ 3・20-21)。アカシは、この言葉を若いキリスト者としての血で封印しました。彼は、死と憎しみと暴力の力と肩を並べて戦い、光と真理によって人びとを勝利に導いたのです。彼は自分の白い衣を小羊の血で洗い、輝かせました(黙示録 7・14 参照)。

世界と接触するサレジオのカリスマは、アカシのなかに、家族とキリスト教共同体で学んだ善良さと寛大さを強化させました。アカシ・バシルはすべてのキリスト者の聖性の模範であり、世界のすべての若いキリスト者の模範でもあります。そして彼は間違いなく、サレジオ会の教育システムが生み出した明確なカリスマ的なしるしである。アカシは、困難、貧困、宗教的過激派、無関心、社会的不平等、差別にもかかわらず、信仰のためにいのちを捧げることができる数多くの勇敢な若者の声を代表する者なのです。この若いパキスタン人の人生と殉教は、謙虚な人、迫害された人、若い人、神の小さなものの心の奥という、思いがけないところにおいて見いだされ、生きている神の聖なる霊の力を私たちに気づかせるのです。

- そして、アルテミデ・ザッティが列聖された年のことを忘れてはなりません。

彼は確かに奉献された修道者でしたが、小さな病院や小さな村の簡素な場所で日々の慈善活動に費やされた彼の聖性の信徒としての側面に私たちは心を打たれずにはいられないのです。彼は、神をその源とし、信仰の動機とし、人生の唯一かつ究極の目標として、犠牲的で忍耐強い仕事をする人びとに対する奉献の模範であり、モデルなのです。

彼らの人生、彼ら全員の人生、そして彼らの模範は、成長を続ける「生地のなかのパンだね」のようなものであり、私たちの内と周りにある神の国を表しているのです。

**「信徒は、信仰が成長するための腐葉土を提供します」**(註 38)。教皇ベネディクト 16 世のこの表現は、非常に多くの信徒、既婚者、家族、キリスト教共同体の信仰と宣教への取り組みによって、キリスト教が世界に根づき、発展していることを思い起こさせるものです。洗礼の恵みによって、信仰は成長し、広がってゆくのです。

同様に、先に述べたサレジオの聖性を生きた信徒の証しびとたちや、その他の数多くの「隣人たち」も、サレジオのカリスマの成長のために腐葉土を与え、提供しつづけているのです。この聖人の仲間たちは、仕事や役割以前に、まず人間関係の質が福音宣教やカリスマの開花のための特権的な現場となることを思い起こさせるのです。

これらの証言は、すでに述べたように聖フランシスコ・サレジオにとっても、またサレジオ家族の父ドン・ボスコにとっても大切な聖性への普遍的な呼びかけを思い起こさせるものであり、彼は聖性の目標を、誰にでも開かれた、たどりやすく、限りない幸福に向かう目標として、修道会の志願者たちや一般の人たちにまで示したのです。



このことは、キリスト者の助けであり、イエスをおとめの胎内に迎え入れた方であり、それゆえ、信仰の母、教師、導き手と呼ばれる聖マリアを、特に、若い世代の聖性への旅に同行させることによって実現されます。特に、若い世代の聖性への旅に聖マリアが同伴することで、彼女の生涯や模範は「パンのためのパンだね」のようなものとして若者たちの心の底で着実な影響をおよぼしはじめるのです。

## 7. 今日の世界におけるパンだね (酵母 YEAST) としての若者たち

今年の『ストレンナ』の呼びかけの最後の話題として、若者について、私たちが共に歩んでゆきたい道について述べてから、締めくくりたいと思います。

「私たちは、心をこめて、声を大にしてお伝えしたいと思います。ヴァルドッコという特別な場所で、つまりサレジオ会の使命が始まったあの場所で、サレジオ会員とサレジオ会の使命のための若者たちとともに、ともに聖人になろうとする共通の意志をもって、私たちにとってここにいることは夢のようなことでした。あなたは、私たちのこの心をその手で受け継いでいます。あなたのこの大切な宝物を大切にしてください。どうか私たちを忘れることなく、私たちの声に耳を傾けつづけてください。トリノ、2020年3月7日」(註39)。

実に、若者は人生を充実させるべく準備をします。私たちはこの旅に同行します。そして、私たちが彼らに対して、あるいは社会や教会に与える非常に大きな奉仕は、彼らが果たすべき社会的な役割、彼らが準備しなければならないことを理解するのを助けることであると私は信じて疑いません。だからこそ、彼らはまた、人類という家族のなかでパンだねとなるよう召されていることを最初に学ぶことになるのです。

この解説を書く準備をしているときに、私は、まさにこの『ストレンナ』の最終章のために、過去の三人の教皇つまり聖ヨハネ・パウロ二世、ベネディクト16世、フランシスコが若者たちに語った呼びかけを探して出して読むことにしました。なぜなら、彼らのメッセージが豊富で非常に活力に満ちていることは疑い得ないと思ったからです。そして、私にはそのように思えるのです。とても現代的で、とてもタイムリーで、あえて言えば、とても「サレジオ的」なのです。そして同時に、教会と世界のなかで若者が目のあたりにしている課題がいかにも膨大で、広範で、厳しいものであるかをはっきりと確認しておきたいのです。彼らが、キリスト教的で社会的な協力姿勢を積極的に心がけ、人類家族の真の「パンだね」として、真に今日の若者であるための挑戦を受け容れることになれば、どんなによいことでしょう。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、亡くなる三年前に、ある講話(註40)のなかで、重大な課題に挑戦しようとする若者たちに対して、キリスト教的で社会的で政治的な生活と献身に関する真の提案としての「八つの大きな挑戦」を提案しました。実際には、この八つの課題は、

ある学者によって「人間を経済と政治の中心に据える」というただ一つの課題にまとめあげられています。その課題とは、あらゆる状況における人間のいのちの擁護、家族の促進と貧困の撲滅（債務削減、開発促進、公正な国際貿易の開放を通じて）、人権の擁護と軍縮のための活動（武器販売の削減、紛争後の平和の定着）、主要な疾病との闘いと最も必要な医薬品をすべての人に行き渡らせること、自然保護と自然災害の防止、そして最後に国際法と条約の厳格な適用、です。

一方、教皇ベネディクト 16 世は、人間の総合的な成長についての回勅『真理にねざした愛』（*Caritas in Veritate*）（註 41）において、地球資源の利用、エコロジーの尊重、財の公正な分配と金融機構の管理、世界の飢餓との戦い、労働の尊厳の促進、最も貧しい国々との人間の連帯、生命文化への奉仕、宗教間対話、民族と国家のあいだの平和構築など、世界の生活にとって緊急かつ不可欠で、今日の若者も関与することができる課題をあげています。

最後に、教皇フランシスコは、あまりにも数多くの若者が現代社会がつくりだす暴力や強制に苦しんでいることに気づいているので、私たちがキリスト者として持っている、そして、それらを引き受け、信仰と献身をもってそれに従事しようとする若者を待っている一連の要求の高い課題を提案しているのです。教皇のさまざまな書き物（回勅、使徒的勧告、そして若者たちに対する呼びかけ）（註 42）を読めば、戦争という恐ろしく辛い状況への対処を考えさせられます（ウクライナの人びとに対する不当な戦争はもう 11 ヶ月も続いていることを皆が知っています）。兵士になることを強制されたり、武装ギャングや犯罪者に加担させられたり、麻薬密売に関与させられたりする子どもたちもいます。少なからぬ子どもや十代の少年少女が、性産業や人身売買の奴隷になっています。そして、民族や信条を理由に疎外され、殉教する人びとや若者たちも後を絶ちません。非人間的な状況での移住の痛みと外国人嫌いの差別から始まる惨劇も忘れることはできません（註 43）。世界中の人びとが捨てられ、人種差別をこうむり、普遍的な人権の侵害もまた、数多くの痛みが存在する世界の現実なのです（註 44）。

私たちがパンだねとなり、塩となり、光となろうとすることで、この人類という家族に、これらすべての相手に対して、そしてさらに多くのことがらにも影響を与えていることを、私たちは果たして理解しているでしょうか（註 45）。これは悲観的な見方と言えるでしょうか。いいえ、そんなことはありません。教皇フランシスコは、今日見受けられる数多くの進歩をも挙げていますが、それは皮肉なことに、同時に「倫理が悪化してゆく状態」でもあるのです。

「アハマド・アルタイエブとともに、私たちは科学、技術、医学、産業、福祉の分野、とりわけ先進国での前向きな進歩を無視することはできません。しかし、このような歴史的な進歩と同時に、国際的な行動に影響を与え、精神的な価値や責任を弱めるような道徳的な悪化が存在することも強調したいと思います。私たちは、『不確実性、幻滅、未来への恐怖に

支配され、狭い経済的利害に支配されたグローバルな状況における緊張の発生と武器・弾薬の蓄積』を目の当たりにしているのです。また、『大きな政治的危機、不公平な状況、天然資源の公平な配分の欠如……中略……貧困と飢餓でやせ衰えた何百万人もの子どもたちの死につながるこうした危機を前にして、国際レベルでは容認できない沈黙が続いている』と指摘することができるのです」(註46)。

この現実、私たち全員にとって、特に若者にとって、キリスト教的、また(ドン・ボスコの家族の中で)サレジオ的な生活を送るという主の呼びかけを大きな課題として感じる機会となっています。

この課題と挑戦は、すでに第二バチカン公会議の終わりに教皇パウロ6世が若者たちに宛てた呼びかけにおいて思い起こされております。教皇は次のように語っています。

「最後に、公会議が最後のメッセージとして伝えたいのは、世界中の若い男女の皆さんです。なぜなら、年長者の手から松明を受け取り、世界の歴史上最も巨大な変革の時代に生きるのはあなた方だからです。あなた方の両親や教師の教えの中から最良の模範を受け、明日の社会を形成するのはあなた方なのです。あなた方は、自分自身を救うか、それとも社会とともに滅びるかのどちらかです。……中略……そして、あなた方の年長者が持っていたものよりも良い世界を熱意を持って築き上げなさい！」(註47)。

今日、私は深い確信をもって、人類という家族のなかで真にパンだねとなるために私たち全員にもたらされたこの要請を、親愛なる若者の皆さんにお伝えします。これらの課題は、皆さんの生活、養成、勉学、仕事、召命をもって、より公正で友愛に満ちた世界を築くという決意にイエスカノーをはっきりとすることを要求しています。これらの課題は、あなた方一人ひとりに対する神の夢に従って、自分の力とエネルギーをすべて注ぐことのできる、挑戦的で刺激的な人生を受け入れるか否かの岐路にあなた方を立たせるものなのです。

そして、あなた方は、特別な、並外れたヒロイズム(英雄主義)を求められているのではなく、ただ——それでも、これはすでに偉大なことなのですが——、あなた方一人ひとりに神が与えてくださった賜ものを実りあるものにし、信仰と真の愛と友愛と奉仕において、あらゆる人に、特に最も弱い人、最も人生に影響を受ける人、最も機会の少ない人たちに成長するよう自ら約束することなのです。

それは、今日、主の宣教的な弟子になりたいと願うすべての若いキリスト者とサレジオ会員にとって貴重な提案なのであり、またキリスト者であろうと他の宗教的信念を持つ者であろうと、本質的で本物の人間性(ヒューマニズム)を求める者であろうと、人間の条件を十分に生きようとするすべての若者に、恥じることなく提供できる、尊厳と範囲の広い挑戦と提案のように思われるのです。それは同時に、セイレーンの神話のように眠りを誘う「安穩とした快適な空間」(コンフォートゾーン)の外側で生きるように導くものでもあります。

今、人間性（ヒューマニズム）に言及しましたが、最後に、サレジオ的な生き方が与える存在感の関わる世界中のあらゆる国のすべての若者を教育することができるこの「サレジオ的な人間性（ヒューマニズム）」を強調することで話題を結びたいと思います。

「ドン・ボスコにとって [サレジオ的な人間性（ヒューマニズム）は]、個人の生活、被造物、歴史の出来事の中にあるすべての肯定的なものに正当な重みを与えることを意味しました。このことは、特に若者が喜ぶような、世界に存在する真の価値を受け容れること、自分の時代の文化と人間発展の流れのなかに身を置き、善を励まし、悪を嘆くことを拒否すること、一人ひとりが発見され、認められ、有効に使われるべき贈りものを持っていると確信して、数多くの人びとの協力を賢明に求めることにつながったのです。若者の成長を支える教育の力を信じ、正しい市民、良きキリスト者となるよう励ますことが大事です。そして、常にどこでも、父として認識され、愛されている神の摂理に自分を委ねることも大事です」（註48）。

最後に、福音に奉仕する私たちサレジオ家族の美しく充実した生活に感謝し、全教会の一部である私たちが、福音化の喜びの任務を受け容れることができるよう主にお願いします。「教会は、あらゆる人と国民に神の愛を明らかに伝えるためにキリストから派遣された」（註49）のですから。

キリスト者の母なる扶助者が、私たち全員が宣教師の弟子となり、彼女の光を反射する小さな星となるよう助けてくれますように。そして、イエスにおいて示された神ご自身による救いの宣言を喜んで受け取ることができるように、心が開かれますように祈りましょう。

アンヘル・フェルナンデス・アルティメ師 S.D.B. 総長

## 註

（註1）EG, 273; ChV, 25.

（註2）FRANCIS, *Angelus*, Rome 14 June 2015. 教皇フランシスコ、アンジェルス、ローマ、2015年6月14日。

（註3）JOHN PAUL II, Encyclical Letter *Redemptoris missio*, Rome, 7 December 1990, no. 40. 教皇ヨハネ・パウロ2世回勅『救い主の使命』1990年12月7日、40項。

（註4）GS, 1. 『現代世界憲章』1項。

（註5）The Constitution was promulgated on the occasion of the celebration of Vespers for the Solemnity of the Immaculate Conception on 7 December 1965. この憲章は無原罪の聖母の祭日のを記念して、前日の1965年12月7日の晩の祈りの儀式の機会に公表されました。

（註6）FRANCIS, *Meeting with the authorities, civil society and the Diplomatic Corps*. Santiago de Chile (16 January 2018), quoted in *Fratelli tutti*, 11. 教皇フランシスコ「市民社会と聖体拝領をめぐる権威者たちと

の会合」チリのサンティアゴ、2018年1月16日、回勅『兄弟の皆さん』11項からの引用。

(註7) Cf. *FT*, 15-17; 18-21; 29-31; 69-71; 80-83; 124-127; 234. 回勅『兄弟の皆さん』を参照。

(註8) Cf. *FT* 88-111; 216-221; *ChV* 163-167. 回勅『兄弟の皆さん』などを参照。

(註9) See the entire Encyclical *Laudato Si'*. 回勅『ラウダート・シ』を参照のこと。

(註10) Cf. *LF* 23-25; *FT* 226-227. 回勅『信仰の光』23-25項。回勅『兄弟の皆さん』226-227項。

(註11) Cf. *LF* 1-7; 35; 50-51; 58-60. 回勅『信仰の光』1-7項、同35項、同50-51項、同58-60項。

(註12) Cf. J.E. VECCHI, *The Salesian Family turns twenty-five*, in M. BAY (EDITED BY), *Passionate educators experienced and consecrated for young people. Lettere circolari ai Salesiani di don Juan E. Vecchi*, LAS, Rome 2013, 137. ホアン・E・ベッキ『サレジオ家族の25年のふりかえり』(M・ベイ編『情熱に満ちた教育者の経験と若者のための奉獻；ホアン・E・ベッキ総長によるサレジオ会員に向けた回状』教皇庁立サレジオ大学、ローマ、2013年、137項)。

(註13) *Letter to Diognetus* (Chap. 5-6; Funk 1, 317-321). 『ディオグネートスへの手紙』第5-6章(フンク編第1巻、317-321頁)。訳註；阿部私訳『ディオグネートスへの手紙』5・1-5、同6・2(なお正式な訳としては、荒井献編『使徒教父文書』講談社[文芸文庫]、1998年、267-268頁も参照のこと)。

(註14) *LG*, 31. The Apostolic Exhortation *Christifideles laici* (1988), sums up very well that it is the task of all the baptised, albeit in different ways, to be yeast in the world: “The images taken from the gospel of salt, light and leaven, although indiscriminately applicable to all Jesus' disciples, are specifically applied to the lay faithful. They are particularly meaningful images because they speak not only of the deep involvement and the full participation of the lay faithful in the affairs of the earth, the world and the human community, but also and above all, they tell of the radical newness and unique character of an involvement and participation which has as its purpose the spreading of the Gospel that brings salvation.” (Cf. *ChL* 15). 『現代世界憲章』31項。

(註15) R. BERZOSA, «¿Una teología y espiritualidad laical?», *Revista Misión Abierta*, ([mercaba.org/fichas/laico](http://mercaba.org/fichas/laico)). R・ベルゾーサ『神学と信徒の霊性?』

(註16) Cf. C. THEOBALD, *La fede nell'attuale contesto europeo. Cristianesimo come stile*, Queriniana, Brescia 2021, 96-146. C・テオバルド『ヨーロッパの生活文脈における信仰；キリスト教とはいかなる態度なのか』クェリニアーナ、ブレシア、2021年、96-146項を参照のこと。

(註17) *GS*, 36. 『現代世界憲章』36項。

(註18) *GS*, 43. 同上43項。

(註19) Cf. C. M. MARTINI, *Los movimientos en la Iglesia*, LEV, 1999, p. 156 (our translation in *English*). カルロ・マリア・マルティーニ『教会における諸運動』LEV, 1999年、156頁。

(註20) *Lumen Gentium*, 31. 『教会憲章』31項。

(註21) Title of Chapter V of *Lumen Gentium*. 『教会憲章』第5章の表題。

(註22) Cf. A. BOCCIA, *Credenti Laici nella Chiesa e nella Famiglia di Don Bosco. Uomini e donne delle tre appartenenze*, Private edition. A・ボッチャ『教会およびドン・ボスコの家族における一般信

徒；三つの動向に所属する男女』私家版。

(註 23) FRANCIS, *Address at the audience with the Salesian Family for the canonisation of Blessed Artemides Zatti*, Paul VI Hall, Rome, 8 October 2022. 教皇フランシスコ「アルテミデ・ザッティの列福式に際しての参列者とサレジオ家族へのあいさつ」パウロ六世ホール、ローマ、2022年10月8日。

(註24) St FRANCIS DE SALES, *Introduction à la vie dévote*, I, 1: ed. Ravier – Devos, Paris 1969, 23 (*our translation in English*). 聖フランシスコ・サレジオ『信心生活の入門』第一巻1章；ラビエール、デボス編、パリ、1969年、23頁。

(註 25) PAUL VI, Epist. Ap. *Sabaudiae gemma*, on the fourth centenary of the birth of St Francis de Sales, Doctor of the Church (29 January 1967), in AAS 59 (1967), 119. パウロ六世書簡

(註 26) *Gaudete et Exsultate*, 10-11. 教皇フランシスコ使徒的勧告『喜びに喜べ』10–11項。

(註 27) FRANCIS, Apostolic Letter *Totum Amoris Est*, on the Fourth Centenary of the Death of Saint Francis de Sales, LEV, Vatican City 2022, 32-34. 教皇フランシスコ使徒的書簡『すべては愛である；聖フランシスコ・サレジオ帰天400周年を記念して』LEV、バチカン市国、2022年、32–34項。

(註 28) I point out that parts in italics and in bold are my choice, precisely to highlight the theme that this commentary on Strenna 2023 intends to highlight in a specific way. 斜体や太字の部分は、まさにこの『ストレンナ2023』についての解説が意図するテーマを具体的に強調するために、私が選んだものであることを、ここで指摘しておく。

(註 29) LG, 31. 『現代世界憲章』31項。

(註 30) ChL, 17.

(註 31) EN, 70.

(註 32) ISS, *Salesian Sources*, 1. *Don Bosco and his work*, Kristu Jyoti, Bangalore 2014, 812-813.

(註 33) J.E. VECCHI, *The Salesian Family turns twenty-five*, 140-142.

(註 34) GC24, no. 71. 『第24回総会文書』71項。

(註 35) GC28, *Action Programme 6*, p. 59. 『第28回総会文書』行動指針6項、59頁。

(註 36) A. FERNÁNDEZ ARTIME, *Letter of the Rector Major at the conclusion of the 2nd Seminar for the promotion of the Causes of Beatification and Canonisation of the Salesian Family*, Rome 20 May 2018. <[https://archive.sdb.org/Documenti/Santita/Seminario\\_2018/Santi\\_2\\_Seminario\\_2018\\_RMlettera\\_en.pdf&gt;](https://archive.sdb.org/Documenti/Santita/Seminario_2018/Santi_2_Seminario_2018_RMlettera_en.pdf&gt;); A・フェルナンデス・アルティメ『総長書簡；サレジオ家族の列聖・列福に関する研修会の閉会挨拶』ローマ、2018年5月20日。

(註 37) ChL, 55.

(註 38) BENEDICT XVI, *Catechesis 7 February 2007*. 教皇ベネディクト16世『2007年2月7日のカテケーシス』。

(註 39) GC28, *What kind of Salesians for the Youth of Today?* Letter of the young people to Chapter members, Annex 3, p. 146. 『第28回総会；今日の若者たちのためのサレジオ会員はいかに生きるべきか；各支部の会員に向けて』アネックス3巻、146頁。

(註 40) JOHN PAUL II, *Address to Ambassadors of Countries Accredited to the Holy See*, Rome, 10

January 2002. 教皇ヨハネ・パウロ二世『正座によって認定された各国の大使に対する挨拶』ローマ、2022年1月10日。

(註41) Cf. BENEDICT XVI, *Encyclical Letter Caritas in Veritate*, Rome, 29 June 2009. 教皇ベネディクト16世回勅『真理にねざした愛』ローマ、2009年1月29日。

(註42) Cf. *ChV*, 72-74; Cf. *FT*, 25. 回勅『兄弟の皆さん』25項。

(註43) *FT*, 38-40. 回勅『兄弟の皆さん』38-40項。

(註44) *Ibid*, 18-24. 同上、18-24項。

(註45) I would like to emphasise in a very significant way what the Rector Major Fr Pascual Chávez wrote about the commitment of the Salesian Family to the defence of life, in all its senses and in all its dimensions. This is a very rich list of our current commitments (which also involves young people): Cf. CHÁVEZ, P., *You love everything that exists, and nothing that you have made disgusts you... Lord Lover of Life. (Wis 11:24.12,1)*, in *Id.*, *Circular Letters to the Salesians* (ACG 396 (2006) Letter 019), LAS, Rome 2021, 604-605, 609-617. 私は、バスクアル・チャーベス元総長が、あらゆる意味および次元においていのちを守るためのサレジオ家族の献身について書かれたことを、非常に重要な作品として強調しておきたいと思います。私たちの現在のコミットメント（若者にも関わる）の非常に豊かな呼びかけとなっているからである。P・チャーベス『存在するあらゆるものを愛すること、そしてあなたが嫌悪感をいだくことは何ともありません……いのちを愛する主』（サレジオ会員への回状；修道会資料 396号、2006年、第19書簡）LAS、ローマ、2021年、604-605頁、同609-617頁。

(註46) *FT*, 29 which also cites the *Document on Human Fraternity for World Peace and Living Together*, Abu Dhabi (4 February 2019): *L'Osservatore Romano* 4-5 February 2019, p.6. 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』29項では、「世界平和を推進して共に生きるための人類の兄弟性について」（アブ・ダビ、2019年2月4日）という資料も併録している旨が記されている（「オッセルバトーレ・ロマーノ」紙、2019年2月4-5日号所載）。

(註47) PAUL VI, *Message to Youth*, Rome, 8 December 1968. 教皇パウロ六世『若者たちへの呼びかけ』1968年12月8日。

(註48) Fr. Chavez, *Like Don Bosco the educator we offer young people the Gospel of joy through a pedagogy of kindness. Strenna 2013* (ACG 415 (2013) Letter 038, op.cit., 1240-1241. チャーベス『ストレンナ2013；やさしさの教育をとおして実現する福音のよろこびを若者たちに分かち合って教育者ドン・ボスコのように生きる』（サレジオ会文書415番、2013年所載の第38書簡、1240-1241頁）。

(註49) *Ad Gentes*, 10. AD（『教会の宣教活動に関する教令』）10項。

2023年1月28日（土）阿部仲麻呂訳

2023年1月31日（火）改訂